（様式１）

令和５・６・７年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン（１年次）【中学校】

【学校名等】

学校名	宮津市立栗田中学校							校長名	中村　敏章
学　年	１年	２年	３年				特別支援	生徒数	４１名
学級数	１	１	１				１		
事業担当教員名	小笠原　智美								

① 中学校区で目指す子ども像	栗田学院　目指す子ども像 （１）夢の実現に向け 自ら学ぶ子ども （２）お互いが認め合える 心豊かな子ども （３）健康で元気に生活できる子ども （４）ふるさとを誇り 地域に貢献できる子ども
② 目指す子ども像	・授業において自分の考えをもった上でそれを発信し、他者の意見も受け入れられる生徒 ・挨拶や他者とのコミュニケーションを大切にでき、人間関係を築く力を身に付けた生徒 ・学院の取組等を通して、自ら考え行動する力や、学院のリーダーとして目的意識をもって行動する力を身に付けた生徒 ・ふるさとみやづ学を中心とした地域の方々との交流を通して、地域への理解と誇りをもてる生徒
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	・やるべきことに真面目に取り組めるので、基礎・基本の学力が定着している。 ・地域や学校への安心感や愛着があり、落ち着いて学校生活、日常生活を送ることができる。 ・自分の意見や考えがあっても、それを発信する力に弱い面があり、自分の言葉で伝える自信がない場合や、間違うことへの不安、目立つことへの拒否感がある。 ・授業における基礎・基本事項の定着場面においては、真面目に頑張って取り組むことができるが、活用的な学習場面では、挑戦意欲をもつ生徒とそうでない生徒との２極化する傾向がある。 ・やるべきことや決められたことに対しては、真面目に取り組める生徒がほとんどである。一方で、初めての環境や知らない場面への不安感も強く、臨機応変な対応や、即興的な対応への苦手意識が強く見られる面もある。 ・生まれ育った地域への安心感や愛着はあるが、環境資源や歴史などへの興味・関心が比較的弱く、ふるさと、地域に対する認識も弱い面が見られる。 ・生徒が個人または学級等で自主的に行動する行事や取組を設定しているものの、授業場面においては教師が説明したり、指示したりする指導に対して肯定的に感じていたり、安心感をもっていたりする生徒が依然多い。 ・生徒自身が自ら考えて調べたり、学習の主体となって学び取ったりする場面が少しずつ増えてきてはいるものの、まだ受け身の姿勢から脱却はできていない。
④ 目指す子ども像に達するための仮説	・単元指導計画と単元を通して身に付ける力を明示することで、学び取る意欲や、学習の振り返りの質が高まる。そのことが学習への自己調整力につながる。 ・各教科の特性や単元の学習内容に応じて、生徒が主体となって学習に取り組める学習形態に取り組ませることで、主体的に学び取る姿勢が芽生える。また、協働的な学びを効果的に取り入れることで、非認知能力の向上につながる。

令和５年５月１日現在

【１　研究主題】

主体性・挑戦意欲の高まる指導の研究
～子どもが学び取る授業づくりを目指して～

【２　研究組織体制】

校長

教頭

栗田学院つながる学び部会
※小中一貫教育として、必要に応じて小学校教員も研究に参加する。

研究推進部会

英語科（教務）・数学科２名・社会科・国語科・理科

学力向上プログラムの活用・実践／研究授業／校内研修
学習アンケート実施・分析／テスト前学習や長期休業の学習補充／学習講座

【３　具体的な取組内容】

子どもが学び取る授業の実践・研究

１　単元指導計画と単元を通して身に付ける力を明示する
　単元導入時に学習後のゴールをイメージさせ、意思をもって学ばせる。

２　毎時間の学習の振り返りをさせる
　１時間の学びについて、文字言語で書いて振り返りをすることによって、自身の学習を見つめる機会を確保する。また、学習の手応えを感じたり、復習の必要性を感じたりと学習調整を図らせる。

３　学びの状況を工夫する
　各教科の特性や単元の学習内容に応じて、一斉指導での学び、協働的な学び（ペアやグループ学習等）、個別最適な学び（自由進度学習）に取り組ませる。特に生徒自身が学びの方法を選べる自由進度学習を学期に１回程度取り入れ、学び取る意識を醸成する。

４　学習アンケートの活用
　学院として学期に１回実施するアンケートで、１～３の実践が生徒の学びの捉え方や学びへの向かい方に変化をもたらしているのか、主体的な学びの姿勢につながっているのかどうかを検証する。

５　校内研修の充実
　個別最適な学びや協働的な学びの実践例や理論の研修、そして個人の学びにつなげるための授業改善に向けた研究を行う。
　質問項目のアンケートから読み取ることができる生徒の特徴等を分析し、課題解決に向けたアプローチを検証する。

【４ 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
全学年	33	目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていっている。	自己調整	
全学年	53	失敗をおそれず、前向きに取り組むほうだ。	チャレンジ精神	
全学年	57	自分にはよいところがあると思う。	自分らしさの発揮	
全学年	73	授業で新しく学習したことをこれまで学習したことと結びつけて理解したり、話合いで活かしたりしている。	精緻化	
全学年	74	ほかの教科の授業で学んだことであっても、教科に関係なく授業中の活動で活かせている。	精緻化	

＊５・６の分析の項目は削除しています。

【７　分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

具体的な指導・支援方法

＜１年生＞

○自己決定・自己表現の場を増やし、できたことや付けた力を評価する。

【個】

⇒自分自身の課題を踏まえた目標設定をさせる。

⇒目標を達成するために計画し実行させる。

【集団】

⇒教師がすべきことを伝えるのではなく、考えて動くよう仕向ける。

⇒表現する場（テーマに沿って対話する等）を設定する。

＜２年生＞

○自分を発揮できるように、挑戦する場の設定をする。

【個】

⇒日々の生活や節目となる行事等で、いいところや成長点を互いにフィードバックさせて、自己理解を進めさせる。その上で、自分に自信をもち、自分のことを発揮できるようにしていく。

⇒自信をもって活動に臨めるように、自分の考えを書いて整理する時間をとる。

⇒将来的な生きる力として、自分に必要なことをメモする習慣を付けさせる。

【集団】

⇒学年で取り組む学校行事（文化祭のステージ発表、総合的な学習の時間の発表会）を挑戦の機会として位置付ける。

⇒日常的に、班長会や委員会等の生徒自身で考え取り組む活動の中で、失敗経験や成功体験の数を積ませ、経験値を上げていく。

⇒授業の話し合い活動等で、進行フレームを作成し、場慣れと方法を体得させる。

⇒ペアワークやグループワークには必然性を持たせ、かかわり合いへの意欲を高める。

＜３年生＞

○意思決定力を育む場の設定と、見通しをもった計画性を身に付ける授業改善を行う。

【個】

⇒自分を語る場面（テーマに沿って対話する等）を設定する。

⇒自分に必要なことを整理する時間（キャリア教育：オープンスクールの計画、学力テストに向けての学習計画、自主学習の計画、進路選択等）を設定する。

【集団】

⇒単元のゴールを明示し、学習全体の見通しをもたせる。

⇒授業ごとに目標設定をさせ、自分で学び取る意識と意欲を高める。

【８　仮説の修正】

・単元指導計画と単元を通して身に付ける力を明示することで、学び取る意欲や、学習の振り返りの質が高まる。そのことが学習への自己調整力につながる。**加えて、自分が毎時間の学びのゴールを設定することで、自己決定力が付く。**

・各教科の特性や単元の学習内容に応じて、生徒が主体となって学習に取り組める学習形態に取り組ませることで、主体的に学び取る姿勢が芽生える。また、協働的な学びを効果的に取り入れることで、非認知能力の向上につながる。

・**授業以外の学校生活や行事などの活動場面においても、自分の思いや考えを伝える場の設定や、言葉をやりとりすることで互いを認め合う機会を作り、自己開示することへの抵抗感がなくなる。**

【９　具体的な取組内容の修正】

子どもが学び取る授業の実践・研究

１　単元指導計画と単元を通して身に付ける力を明示する

単元導入時に学習後のゴールをイメージさせ、意思をもって学ばせる。**授業の目標は教師から提示しつつ、毎時間生徒個々が「学びの目標」を設定し、意思決定と学習への意欲向上を図る。**

２　毎時間の学習の振り返りをさせる

１時間の学びについて、文字言語で書いて振り返りをすることによって、自身の学習を見つめる機会を確保する。また、学習の手応えを感じたり、復習の必要性を感じたりと学習調整を図らせる。

３　学びの状況を工夫する

各教科の特性や単元の学習内容に応じて、一斉指導での学び、協働的な学び（ペアやグループ学習等）、個別最適な学び（自由進度学習）に取り組ませる。特に生徒自身が学びの方法を選べる自由進度学習を学期に１回程度取り入れ、学び取る意識を醸成する。**協働的な学びについては、グループワークなどでの進行フレームを作成し、不安感をなるべくもたずに取り組めたり、必然的に発話したりする環境をまずは設定する。**

４　学習アンケートの活用

学院として学期に１回実施するアンケートで、１～３の実践が生徒の学びの捉え方や学びへの向かい方に変化をもたらしているのか、主体的な学びの姿勢につながっているのかどうかを検証する。

５　校内研修の充実

個別最適な学びや協働的な学びの実践例や理論の研修、そして個人の学びにつなげるための授業改善に向けた研究を行う。

質問項目のアンケートから読み取ることができる生徒の特徴等を分析し、課題解決に向けたアプローチを検証する。

６　**対話力の育成に向けた「雑談力」を育てる取組を行う**

朝読書の時間や、学級活動などを活用し、自分を語る場面（テーマに沿って対話する等）を設定し、やりとりを楽しんだり、自分の考えや感じたことを言葉に出すことに慣れたり、他者の考えや感じ方を受け止めて反応したりする中で、コミュニケーションを図れる素地を育成する。

【10　生徒の変容（普段の様子から）】

○学習に対する意思決定と意欲の向上

授業の最初に、「学習内容」の提示をして、生徒個々が「学びの目標」を設定する流れを作ったことで、数学や英語の授業では、生徒の目標の立て方に変化が見え始めている。

例えば、英語においては、『どちら、とたずねる新しい疑問詞』と提示すると、「新しい疑問詞を知り、意味に合った疑問詞を言えるようにする」や、『新しい疑問詞を使った対話文』と学習内容を提示すると、「新しい対話文を今までの学習を活かして理解する」など、既習事項も踏まえた学習を意識した目標が立てられる生徒が増えてきた。数学では、学習内容が『形は違うけど面積は等しい三角形』に対して、「なぜ面積が同じなのか考える」という目標を立てた生徒が、授業後には「底辺と高さが等しいならば、面積が等しいのだと分かりました。」と書いており、目標をもった学習をした上で達成できたことが見てとれる。

○テーマに応じた対話力を付けるための活動「栗中 TALK Time」でのコミュニケーション力の向上

週１回、１０分間の設定で、与えられたテーマに対して意見を述べ合う、または聞き合う取組を学年単位で行っている。例えば、「自分が好きなおでんの具」「自分が好きなおにぎりの具」「２０２３ハンバーガーショップでの売り上げベスト５」などである。グループ分けは担任に委ねている。自由に話せる時間の中で、口火を切る生徒、ひたすら自分の意見を話し続ける生徒、頷いてきく生徒、授業中とも違う様子を見せる生徒など、さまざまな姿が見られた。初回は、グループのメンバーに対して、ずっと自分の主張だけを伝え続けており、他のメンバーはただ頷いて聞くしかない状況だったが、回を重ねるごとに他の生徒が言う意見を聞くことができたり、それに対して頷けたり、「僕もそう思う」と声に出して同意を伝えられたり、と会話を楽しめる姿が見られるようになってきた。

○学習アンケートの活用

栗田学院では、従来から年３回の「学習アンケート」を実施してきたが、今年は「学びのパスポート」の項目から付けたい力を問うものを組み入れて刷新して実施している。２学期の結果では、自己調整力や好奇心の項目に前向きな回答をする生徒数に伸びが見られた。学校行事でのリーダー活動や、学級の取組の自治活動を促し自分たちで考えて取り組む過程で、達成感を感じたり、経験値が上がって自信が付いたりしていると考えられる。

○「～学びのパスポート～振り返り　自分の学びの様子と成長を振り返ろう」の継続的な取組

２学期初めに個人結果票の返却と共に、教科の結果と非認知能力の結果について振り返り、２学期末にも振り返りの機会を持った。生徒の言葉の中には、「勉強の仕方を変えたことで点数があがった。少し自分にあった勉強法が見つかったかも。分からないと思ったことは、先生や友達、親に聞くことができたから次は教えていく。」、「これまで学習してきたことを使ったり、まずは自分で考えたりすることができました。目標や物事に対し、前向きに取り組むこともできました。でも、自分らしさを大切にし、発揮することはできていないと感じました。他人とのかかわりを大切にすることも頑張りたいです。」と書くなど、客観視（メタ認知能力）したことを言語化できるレベルが増えてきていると感じる。

【11　２年次の研究構想】

子どもが学び取る授業の実践・研究

1　単元指導計画と単元を通して身に付ける力を明示する

単元導入時に学習後のゴールをイメージさせ、意思をもって学ばせる。授業の目標は教師から提示しつつ、毎時間生徒個々が「学びの目標」を設定し、意思決定と学習への意欲向上を図る。

2　毎時間の学習の振り返りをさせる

１時間の学びについて、文字言語で書いて振り返りをすることによって、自身の学習を見つめる機会を確保する。また、学習の手応えを感じたり、復習の必要性を感じたりと学習調整を図らせる。

⇒1，2を連動して継続し、さらに実践を教職員間で共有する機会を定期的に持ち、振り返るようにする

3　学びの状況を工夫する

各教科の特性や単元の学習内容に応じて、一斉指導での学び、協働的な学び（ペアやグループ学習等）、個別最適な学び（自由進度学習）に取り組ませる。特に生徒自身が学びの方法を選べる自由進度学習を学期に１回程度取り入れ、学び取る意識を醸成する。協働的な学びについては、グループワークなどでの進行フレームを作成し、不安感をなるべくもたずに取り組めたり、必然的に発話したりする環境をまずは設定する。

⇒継続して実施

4　学習アンケートの活用

学院として学期に１回実施するアンケートで、１～３の実践が生徒の学びの捉え方や学びへの向かい方に変化をもたらしているのか、主体的な学びの姿勢につながっているのかどうかを検証する。

⇒継続して実施

5　校内研修の充実

個別最適な学びや協働的な学びの実践例や理論の研修、そして個人の学びにつなげるための授業改善に向けた研究を行う。

質問項目のアンケートから読み取ることができる生徒の特徴等を分析し、課題解決に向けたアプローチを検証する。

⇒3学期初めにも、「認知能力・非認知能力を一体的に育むために」と題して、3学期の具体的な実践計画を立てる校内研修を行った。学びのパスポートを中心に据えた研修をするようになってから、先生方が「あの生徒は、非認知能力の●●の項目が～だったから、…した方がいいよね」など、生徒理解の一つの指針になっていると感じる場面が増えた。もちろん、生徒は日々変化しており、調査日の結果がすべてではないが、そうした客観的なデータを踏まえて、目の前の生徒にどう支援・指導するか、という視点になっていることが大きな変化だと感じる。次年度も、校内と学院（幼・小・中）での計画的な研修を進めていきたい。

6　対話力の育成に向けた「雑談力」を育てる取組を行う

朝読書の時間や、学級活動などを活用し、自分を語る場面（テーマに沿って対話する等）を設定し、やりとりを楽しんだり、自分の考えや感じたことを言葉に出すことに慣れたり、他者の考えや感じ方を受け止めて反応したりする中で、コミュニケーションを図れる素地を育成する。

⇒「栗中TALK Time」の取組を継続し、それぞれの思いを伝え、受け止め合うとともに、社会的な話題や内容について、さらに広い視野に立って意見を述べ合えるような時間にしていきたい。